

案内者寛文二年印本 四の卷、七月七日東西本願寺の花東西ともに對面所の簷に立らる、造物籠にさす、略 近年は江戸酸漿子とて、七月に色のあかきをもとめ出して、よき緑色の物とすといふ事あり、寛文の初に近年といへば、此江戸は、づきは萬治のころよりありし物歟、俳諧毛吹草

寛永十年撰の季寄八月の條に、鬼灯書は夏なりとあり、案内者にいふところを見れば、七月に色づく鬼灯は萬治前はなかりしなるべし、

江戸新道延寶六年印 里の子やするに吹らん江戸鬼灯 心色 柳亭云、此句江戸廣小路に

は、上の五文字いかなる風とあり、略 中

いま丹波鬼灯の名をいひて、江戸鬼灯の名をいはず、今六月より色づきたる鬼灯あるは、是則江戸鬼灯歟、又いつか江戸鬼灯は絶て、丹波の國の種をもとめて、植けるもの歟、

江戸酸漿の條考 追

延寶四年梅盛が著し、類船集に、山茨菰ホツヅキむかしよりありつらめど、近年江戸酸漿とて、美しく赤きあり、青ほ、づきの時分には、はや珍らしければ、もてはやす事とぞ、丹波より來る、青酸漿は吹散されぬべし、肴になり、鱈にはさまれ云々、か、れば前にもいふごとく、いま夏より色づくは、江戸鬼灯にて、丹波の種にはあらざるなるべし、

龍葵

〔本草和名十八〕龍葵、一名苦菜、出蘇敬注和名古奈須比、一名久佐奈須比、

〔倭名類聚抄十七〕龍葵、本草云、龍葵、和名古奈須比味苦寒無毒者也、

〔箋注倭名類聚抄九〕蘇敬曰、龍葵即關河間謂之苦菜者、葉圓花白子若牛李子、生青熟黑、但堪煮食、不任生噉、本草圖經云、葉圓似排風而無毛、子亦似排風子、李時珍曰、四月生苗、嫩時可食、柔滑、漸高二三尺、莖大如筴、似燈籠草而無毛、葉似茄葉而小、五月以後開小白花、五出黃蕊、結子正圓、大如五味子、上有小蒂、數顆同綴、其味酸、中有細子、亦如茄子之子、